

復興支援のご協力をお願い

熊本県・人吉市のアウトドア会社 ランドアースの支援活動を応援してください！



その時、私の仲間は決死の覚悟で救出作業をしていました。

逃げ遅れた15人、九死に一生 ラフティング舟で屋根上から救出

球磨川の氾濫で集落全体が濁流にのまれた熊本県球磨村の渡地区。逃げ場を失った15人の住民を救ったのは、ゴムボートで激流を下るラフティング会社「ランドアース」のスタッフたちだった。

「集落にいてくれて良かった」。住民の間にそんな感謝の声が広がる。

4日午前6時半ごろ、平屋の自宅にいた小川一弥さん(78)と典子さん(75)は逃げ遅れたことに気付いた。室内に濁流が一気に流れ込み、屋根裏へ上がったものの、その先には壁しかなかった。

高さ5メートルほどの信号機まで濁流に漬かった同地区。一弥さんは目についた鉄パイプで壁に穴を開け、屋根の上に出したが、濁流が迫っていた。「流されたら終わり」。典子さんを励まし、寄り添った。

「はよー、助けてー」。あちこちから悲鳴が響く中、高台の氏川マヤさん(47)宅に避難した近所の住民たちは見守ることしかできない。その声に、氏川さん宅に身を寄せていた近くのラフティング会社社長の迫田重光さん(53)とスタッフ2人が反応した。

「ボートさえあれば」。そう思っていると、ランドアースの倉庫から流出した修理中のボートを、住民男性が運良く拾い上げたことが判明。ただ、水をかくパドルの代用品はシャベルやほうきしかなかった。

ボートの制御は難しかった。スタッフの一人、久保田立爾さん(38)は「レスキューの知識はあるけど本番は初めて」。それでも水流の特性を見極めるプロの目で危険を回避。安全に、確実に、屋根の上で震える住民を次々に救出した。

小川さん宅の周りの濁流は渦を巻いていた。「ハイリスクだけドスピード優先。現場は寒く、高齢者は寒さで低体温症になりやすい」。別のスタッフ永田雅代さんがロープを体に巻き付けて濁流に飛び込み、泳いで救助。救出された住民は氏川さん宅で着替えさせ、布団でくるんで温めた。

被災した同社事務所では5日、スタッフ総出で室内にたまった泥のかき出し中だった。迫田さんは「片付いたら、ここをボランティア基地にする」。地域の一員として手を取り合い、復旧、復興への苦難も乗り越えるつもりだ。(古川努) ※7月6日の西日本新聞より

レイクウォークチケットの販売をします。

2020年8月15日まで 100セット限定

レイクウォークでは、この熊本県人吉市のアウトドア会社「ランドアース」の支援金を募らせていただきます。

①レイクウォークみなかみベース、四万湖ベースにて、支援金の募金箱を設置させていただきます。

②直接支援金を送っていただける方は、下記口座へ直接送金をお願いいたします。

送金していただいた方は是非、レイクウォークまで教えてください。代表HIDEから感謝のお手紙を送らせていただきます。
ゆうちょ銀行 店番 718 口座番号 2185022 ヌ)ランドアース

③レイクウォークの前売りチケットを販売させていただきます。1枚1,000円の券を10枚を1セットで10,000円にての販売です。(何のお得感もありません)が、そのうちの30%を支援金に充てさせていただきます。お申し込みは、レイクウォークホームページのお問い合わせフォームより

①お名前 ②希望セット数(10枚1セット=10,000円)

③郵送先住所 ④電話番号 ⑤メッセージ(任意)

をお知らせ下さい。ご入金確認後、8月16日より順次発送させていただきます。多くの方の気持ちを届けたいので、お一人様につき10セットまでとさせていただきます。



熊本県・人吉市 アウトドア会社 ランドアース



代表 迫田 重光

ひで、ありがとう。

会社が洪水で屋根まで浸かって消えた時俺の中でランドアースという会社は終わったと思った。もうここまで何十年もやったからもうお終いにしようと思った。だけどスタッフ、地元、お客さんが頑張れ頑張れと励ましてくれ、沢山の支援をしてもらっている今、もう一度立ち上がらなければランドアースファンの皆さんに申し訳ない。皆さんの思いに応え、リスタートする事に決めた。もう一度やれるとこまでやってみる。応援本当に有り難う。この恩は生涯忘れなない。

レイクウォーク代表 高橋秀典／HIDEよりお願い

私と、シゲ(ランドアース代表迫田重光氏)との出会いは、今から約25年前、1995年ニュージーランド(NZ)のクウィーンズタウン(QT)という町でした。当時、私はプロのリバーガイドになるためのトレーニング中。ちょうどその頃シゲはラフティングの会社を熊本で立ち上げたばかりで、本場NZのQTに視察に訪れていました。まだ日本で「ラフティング」と言っても通じない、そんな時代です。

とても気さくで豪快な彼は、すぐにNZの仲間達にも溶け込み、一緒になって馬鹿騒ぎしていました。「いつか、日本でもこんなアウトドアを楽しめる社会、環境になれば最高だよな!!」というようなことを語り飲みしていたことを思い出します。

昨年には念願だった日本初の「ジェットボート」の運営も始め、これからという時に「新型コロナ」と「水害」のダメージを受け社屋はほぼ全壊、装備はほぼ全ては流されてしまいました。そんな中、彼らはたまたま近くの方が確保してくれていたボートで救出活動をしていました。一度は事業継続諦めたようですが、周囲のみなさんの声のおかげで、再起を決めています。是非、ご協力をお願いいたします。